

【論文】

横須賀市自然・人文博物館の研究と教育（1） — 羽根田弥太と柴田敏隆の時代 —

Research and Education at Yokosuka City Museum (1)
— The Age of Yata Haneda and Toshitaka Shibata —

瀧端 真理子*

Mariko TAKIBATA

Abstract:

In early days of the Yokosuka City Museum (YCM), there were two trends of the museum activities. A leader of the first was Dr. Yata Haneda, who had experienced the British way of museum at the old Raffles Museum in Singapore under Japanese occupation. The second was lead by Naotada Akaboshi and Toshitaka Shibata, who respected an educational function to citizens. Shibata, in particular, criticized a devotee of academic method of the first group and was opposed to conservative museum professionals who would only devote themselves to collection and classification. However, we cannot deny the fact that an opposition between the two groups has enlarged a capacity of the museum activities. Shibata and Taira Kaneda created a new direct nature observation method, and insisted that such observation is more important than just learning the name through collection.

Toshiro Ito was influenced by Shibata, and directed his attention to natural surveys organized by museum professionals of the YCM. Meanwhile, Ito proposed that in order for a museum to be public goods, citizens' participation in survey and study should be indispensable. Between the opening of the YCM and 1974, there were some natural surveys at the YCM in collaboration with Yokosuka Plant Society and the Nature Conservation Society of Miura Peninsula. The activities of Yokosuka Plant Society and Sagami Shell Club can also be regarded as citizen participatory.

Ito's hypotheses about public goods requires more discussions: how the citizens, who participated in joint surveys or studies organized by museum professionals, changed their recognition and actions, and also transformed the museum and the community.

* 追手門学院大学

平成16年1月14日受理

1. はじめに

伊藤寿朗は、博物館がその公共性を獲得するためには、具体的には市民参加型の調査研究活動が必要であることを指摘し、活動例として大阪市立自然史博物館や、横須賀市博物館（現横須賀市自然・人文博物館）、東京都高尾自然科学博物館、豊島区立郷土資料館などを上げている（伊藤 1991）。さまざまな館種の中でも特に自然系博物館は、標本の収集、生物の分布調査などで市民の参加を組織しやすく、また市民の協力なしには、コレクションやデータの蓄積そのものが困難であるため、市民参加型の調査研究活動が根付きやすい。伊藤の、博物館の公共性にまつわる上記の主張は、すべての館種に適合するわけではないと考えられるが、そのことを前提とした上でなお、伊藤の「博物館が市民にひらかれた公共機関であることの意味は、活動を通して、市民自身が自己教育力を身につけ、その成果が将来何らかのかたちで地域や館に蓄積されていくところにある。この蓄積が、さらに人びとに広く深く活用され、社会的に還元されていくようなサイクルの成立こそが、博物館のもつ公共性の中身である」（伊藤 1991）という主張は、博物館の公共性に関する、ひとつの重要な論点と言えよう。今日、財政状況の悪化に伴い、民間のみならず国公立の博物館も、その存在意義、公共性の有無を鋭く問われる状況にある。博物館の公共性にまつわる考察は、緊急度が高く、また本来的にはつねに考え続けられねばならない問題であろう。

さて、伊藤は、市民参加型の調査研究活動の必要性を指摘しながらも、その調査研究活動の質について詳しく言及していない。筆者は、これまでに伊藤がモデルとした事例のうち、大阪市立自然史博物館を取り上げ、具体的な活動内容を明らかにしてきた。そこで分かったことは、大阪市立自然史博物館では、市民を学芸員と同じレベルに引き上げ、市民と学芸員が対等な関係を築くことが最終目標とされ、入門レベルから学術研究までのさまざまな活動と、市民参加あるいは市民主導による調査研究の成果が蓄積されてきたということである（瀧端 2002；2003b）。一方、伊藤が「地域博物館」の旗手とみなした平塚市博物館（伊藤 1991）では、個別専門分野の枠を超えた、学術研究とは異なる意味を付与された市民参加型の共同調査が目指されてきたのではないかと考えられる。つまり、「市民参加型の調査研究」と一言で言っても、その内容や目的は一樣ではないということである。生物の分布調査という観点から見れば、環境指標を利用した自然度調査・自然保護運動の一手法としての参加型調査の流れがある（長谷川 1975；酒井 1975；堀田 1977；奥谷 1980）。

また、博物館における調査研究の方法については、後藤和民が、「民衆とともに記述すべき」生活史について言及し、その実現のためには、博物館の物理的条件も広く市民に開かれる必要があることを主張している（後藤 1979）。こうした博物館における調査研究の担い手の問い直しは、コミュニティー・ミュージアム論やエコミュージアム論（ジロディ 1993；山本 1997；能登路 1999；大原 1999）などと共通点を持つ思想と言えるのではないだろうか。

伊藤が「第三世代の博物館」論や地域博物館論を構築する際、伊藤に影響を与えた代表的実践家かつ論者としては、大阪市立自然史博物館の日浦勇学芸員、横須賀市博物館の柴田敏隆・元学芸員、平塚市博物館の浜口哲一学芸員を上げることができる（伊藤 1986）。日浦と柴田は『自然史博物館の収集活動』の共著者であること（柴田・太田・日浦 1973）、また、浜口は若い時代に横須賀の柴田から影響を受けていること（浜口 2000）から、横須賀市博物館での活動の実際を検討することは、伊藤の博物館論形成過程の解明に寄与すると考えられる。また、現在、横須賀市自然・人文博物館をも巻き込む形で、三浦半島エコミュージアム構想が立ち上げられており（瀧端 2003a）、横須賀市博物館の活動実態の解明は、市民参加型の博物館活動をめぐる問題点や今後の課題を考察する手がかりを与えてくれると考えられる。まず本稿では、横須賀市博物館前史から、1974年の羽根田弥太館長及び柴田学芸員の退職までを、主として扱うこととする。

2. 博物館前史

現在の横須賀市自然・人文博物館成立の前史としては、二つの要素を上げることができる。一つは、博物館発足当初から専門職として勤務した羽根田弥太の戦時中の博物館体験であり、もう一つは、郷土史家の高橋恭一や、独学で三浦半島の考古学研究を開拓した赤星直忠らを中心とする郷土教育の伝統である。

まず、羽根田の戦時中の博物館体験について概観する。羽根田は東京慈恵医科大学衛生学教室に助手として在籍中の1937～1942年にかけて、日本学術振興会が設立した南洋パラオ熱帯生物研究所の研究員として、南洋群島に4回出張し、発光生物の研究を行っていた。日本軍のシンガポール占領に伴い、英国によって開設されていたラッフルズ博物館・シンガポール植物園は、日本の支配するところとなり、羽根田も昭南博物館・植物園と改称された旧ラッフルズ博物館に陸軍司政官として赴任、徳川義親総長の帰国後は1945年8月まで博物館長を務めた。

昭南博物館・植物園では日本軍占領下にあっても、植物学者コーナーやホルタム、水産局長だったパートウィッスルら英国人科学者が引き続き博物館資料の維持管理に当たっていた。コーナーは、のちにその著作の中で、「ものを収集し、整理して保存または展示することは、博物館の仕事であるが、それより重要なことは、研究をすること、その業績を発表して後世に残すことである。この重要な使命を、昭南博物館は、戦時中であっても片時も忘れなかった。私たち日本人学者も、それぞれの専門分野で黙々と仕事をしていた」と記しており、当時のラッフルズ博物館は、学術研究志向の強い博物館であったことが推測される。

戦後、羽根田はパートウィッスルの紹介が縁で、第1回発光生物国際会議（1954年）に招待され、これを契機に国際的に活躍するようになった。また、日本の無条件降伏に伴い、羽根田の書類や研究ノート類は全て焼かれたが、パートウィッスルの手によって英訳されていた発光

魚に関する論文だけが焼失を免れ、この論文は1950～1952年にかけて『ハワイ大学紀要』(Pacific Science) に4回に分けて掲載された(コーナー 1982; 羽根田 1972; 1985)。

このような羽根田の英国型博物館体験は、のちに横須賀市博物館の運営方針に大きな影響を与えることになった。羽根田は、復員後、母校慈恵医大の矢崎芳夫の勧めで横須賀市の技師となり、教育部に勤務することになったが、この時の上司が、のちに横須賀市長を4期16年勤めた長野正義(1957年7月～1973年7月市長在任)であった(横須賀市博物館 1978a; コーナー 1982; 羽根田 1985; 小田原 1995)。

一方、昭和初期、師範学校の世界では郷土研究と郷土教育が盛んであった。三浦半島にもその伝統があり、1948年、横須賀市教育委員会社会教育課に横須賀市郷土文化研究室が置かれた。この研究室には、郷土研究家であり『新三浦半島史』の著者である高橋恭一が在籍していた(高橋 1958; 柴田 1992; 湯田 1992)。

また赤星直忠は旧制横須賀中学在学中から考古学を志し、20歳代からは『考古学雑誌』に多くの報告を寄稿していた。赤星は、小学校訓導や県師範学校訓導を務める傍ら、三浦半島域の発掘調査を続けていた。赤星はほとんど独学で考古学を身につけ、唯一の指導者は自ら訪ねた東京帝国博物館の高橋健自であった(赤星 1929; 岡本 1992; 貫 1992; 竹澤 1992)。

郷土文化研究室の設置が刺激となり、1949年には市内在住の郷土研究家が集まり三浦半島研究会が発足した。郷土史では高橋恭一、赤星直忠、岩崎義朗ら、植物では大谷茂、石渡治一、増島弘行ら、貝類では野村洋太郎、斎藤孝ら、そして生物では羽根田弥太、柴田敏隆らが参加していた。柴田は当時まだ東京農林専門学校(現東京農工大)で獣医学を学んでいたが、幼い頃から動物好きであり、小学校5年生頃からは三浦半島の山野を歩き回っていた。

柴田は農林専門学校時代に「日本野鳥の会東京農専支部(野鳥研究会)」に入ったが、そこでの先輩には中坪禮治(のちの日本鳥類保護連盟専務理事)、村上司郎(のちの日本野鳥の会神奈川支部長)らがいた。柴田らは、東京農業大学「日本野鳥の会農大支部」の学生たちや明治大学学生の小野正行、同年代の「日本野鳥の会」の会員たちとも交流を深め、卒業後は「鳥獣生態研究会」を組織していた。小野は鳥類の仮剥製製作の技術に優れ、小野が製作した多くの剥製は、「鳥獣生態研究会」の中心メンバーであった中坪が、会の共有財産として保管していた(柴田 1992; 1995; 林・鈴木 1990)。

農専を卒業した柴田は、博物館が出来るまで教員として待機するようにとの話から、市立坂本中学の理科教員となる。当時は学校に来ずにドブ板通りで靴磨きをする子どもたちを、学校に連れ戻すような教員生活であったという⁽¹⁾。一方、赤星の発掘品は、坂本の旧陸軍銃砲兵連隊将校集会所が教育研究所に転用されたのを機に、その研究所集会所に仮保管されたが、やがて学校教育関係者から邪魔者扱いを受け、久里浜の旧海軍施設の武道館に移転させられた。さらに、武道館も小学校の体育館に使うために出土品を撤去してほしい、という話が持ち上がった

た頃、博物館設立の動きが生まれた（柴田 1992）。

3. 羽根田と赤星の博物館観の相違

1953年、久里浜の旧海軍工作学校兵舎を改築して、ペリー記念館と体育館が作られた。1953年はペリー来航100周年に当たり、また翌1954年の神奈川県国体で横須賀が卓球会場を引き受けねばならなかったため、記念館と体育館が作られたのである。ペリー記念館は市立博物館としての整備が進められ、1954年4月には博物館法にのっとった市立の総合博物館、横須賀市博物館として開館した。博物館の展示資料は、赤星の発掘品、羽根田の発光生物のコレクション、三浦半島研究会副会長大谷茂による三浦半島の植物標本、柴田による鳥類・哺乳類・両生爬虫類の標本によって構成されることになった。また、柴田が所属していた鳥獣生態研究会の共有財産として保管されてきた鳥の仮剥製約100点は、1954年5月に横須賀市博物館に収蔵されることになった。当時逗子中学校長でもあった大谷茂は、1929年からの3年間、牧野富太郎の自宅で毎月1回、単子葉植物の系統分類学の指導を受けていた（横須賀市博物館 1978b；1982；土屋 1983；柴田 1992；1995b）。

高橋は、神奈川県文化財協会常任理事であり、1946年に結成された三浦半島郷土史研究会の事務局は、高橋が校長を務めていた旧制三浦中学に置かれていた（鈴木政平 1954；川上 2001）。博物館の発足が決まり、建物が完成すると人文科学の研究室には高橋と赤星の机が置かれた。年齢や経歴から赤星より先任格の高橋は、自他ともに初代館長と考えられていた、と柴田は記している。また赤星は、博物館の建設に大変な意気込みをかけており、「出来たら（当然ながら）専任の研究員になる。君もそうしたまえ。と先生から良く言われもした」と柴田は記している（柴田 1992）。

ところが、1954年の開館に際して、鈴木政平教育次長が館長事務取扱を兼務、専門職としては、市の技師であった羽根田と、県教員から市職員に転じた柴田が採用されただけであった。この背景には、当時の市の財政事情と、開館当時の教育長で後に横須賀市長となる長野が、羽根田に信任を寄せていたという事情があった。市条例上の人的構成は、学芸員1、学芸員補1、書記1、使丁2の5人であり、この他に高橋恭一、赤星直忠、大谷茂、岩崎義朗の4人が研究嘱託として委嘱された。1954年10月に学芸員資格を取得した羽根田は、翌年9月館長となった（鈴木政平 1954；柴田 1992）。

開館当初、郷土博物館的な博物館を目指していた赤星（1951～1968年横須賀市立工業高校講師）は、展示の模型から解説パネルまで一切を自作し、しかも郷土部の生徒を動員する、その過程そのものが教育的に意義があると考えていた。これに対し羽根田は、学校の文化祭のような展示では困るとし、展示解説を業者の手によって横書きにしたいと主張し、赤星と対立した。徹底的な現場主義者であった赤星は、横須賀考古学会を主宰し、多くの後継者を育てた（柴田

1992)。横須賀考古学会が編集・発行した赤星の追悼文集には、37名が追悼文を寄せており、以下にそのいくつかを引用したい。

昭和十六年の秋、当時小学校六年生であった岡本勇氏は、赤星先生から授業を受けた印象を次のように述べている。「六年生の教科書に“古代の遺物”と題する一文が載っていた。この授業のさい、赤星先生がリヤカーに一杯の遺物（埴輪・縄文土器・須恵器・石器など）多数を積んで私たちの小学校を訪れ、教壇にところせましとその遺物を並べ、ていねいな説明をして下さった。博物館などには縁のない田舎の小学生にとって、はじめて見る遠い先祖たちの遺物とそれについての親切な説明には、正直なところ大きな感動を受けた。」（竹澤 1992）

先生は発掘調査の休み時間には、私達のような小学生でも相手にしてくださり、掘り上げた貝塚の中から私達が拾い集めた土器片などを見て、土器片とそうでない物を説明しながら分けてくださった。……先生の私に対する指導は、今の大学などでは考えられないような個人指導であった。一九六七～六八年にかけて行われた雨崎洞穴の発掘調査では、私の横につきっきりで、いっしょに貝層を掘りながら貝の名前などは「釵持君、これはイガイだよ。これはクボガイだよ。」と一つ一つ貝を示しながら教えていただいた。（釵持 1992）

私が神奈川県文化財保護課に勤務していた時、県内の市町村にでかけると、必ずといっていいくらい文化財委員さんから、先生に親しく教えを受けたという話をうかがった。先生のフィールドノートをもても、地元の郷土史家との深い交流がうかがえる。（鈴木保彦 1992）

柴田は後年、赤星のことをこう記している。「若い研究者、学生、児童には何時も親切丁寧に、わけ隔てなく接して依怙最良がなかった。だから先生の野外調査には、若い男女に小学生までが一緒に和やかな雰囲気満ちていた。先生はまた奉職する市立工業高校に郷土部を設けて、部員諸君に放課後や日曜日などに研究の指導をして優れた成果を収められた。それは只に考古学だけに止まらず、農・漁業民俗、民間信仰、民話伝承、方言にまで広く及び、ガリ版刷の機関誌に優れた論考や報告を残している」（柴田 1992）。

一方、博物館の側は、1955年12月には、斎藤報恩会博物館長やパラオ熱帯生物研究所長を歴任した畑井新喜司東北大学名誉教授や、同じくパラオ熱帯生物研究所にかつて在籍した日本学術振興会の新谷武衛を囲む座談会を、長野教育長らを交えて開催している。この席上、畑井は、「どんな立派な展示をしてみても、研究発表をしなければ、ついには見世物に終わるでしょう」

と述べ、博物館レポートか紀要を出す必要があることを指摘している。新谷は、日本で研究報告を出しているのは国立科学博物館、斎藤報恩会博物館その他数える位しかないが、久里浜でも出版物が出せるなら館の大きな特徴になるだろう、と述べている。さらに、新谷は、「オズボーンの言に『ニューヨーク自然科学博物館は科学者のために』とあったのですが、これを三代目になって『市民のために、そして科学のために』と改められました。これは非常によい言葉であると思います」と述べている⁽²⁾ (羽根田 1956a)。この言葉は、のちに柴田によって、『自然史博物館の収集活動』(1973) などの中に形を変えて引用されることとなる。

これに先立つ1955年7月には『博物館ニュース』No.1が発行され、翌年からは『横須賀市博物館雑報』と改題された。研究報告は自然科学部門が1956年に、人文科学部門が翌1957年に創刊された。この研究報告の横書き統一論で、羽根田と赤星はさらに確執を深めた。横須賀市立工業高校時代の赤星の教え子の一人、小暮慶明は、「発掘で遺物を持ち帰ったり、民俗資料を採取して来ると、館長はこんな汚いものを拾ってきたと怒る」「この博物館は戦後に僕達が郷土研究室として出発させたのに」「人文関係の予算を削って、光ものばかりにあててしまう」といった赤星のもらした言葉を記憶している。やがて1965年頃、赤星は遺物を横須賀市博物館から引き上げ、この遺物の一部は、後に神奈川県立博物館に収蔵されたのであった(横須賀市博物館 1978c; 柴田 1992; 小暮 1992)。

4. 羽根田と柴田の学芸員観の相違

1945年の秋、柴田は旧制横須賀中学(1948年学制改革によって県立横須賀高校と改称)で、友人の河原孝忠とともに生物部を創設する。もともと死体愛好少年であったという柴田は、1945年7月の空襲で兵隊の死体を見て、そのむごさを感じたという。8月15日、柴田は、これで好きなことが出来る、鳥ができる、と思い、この戦争体験が、生物部を作った原点となった⁽³⁾。横須賀は、軍都として海軍を中心に発展し、海軍関係の諸施設、学校が市内各所に設置され、市民の約4割が軍関係者、市域の約3割が軍関係の土地であった。敗戦までは、東京湾要塞地帯の最重要地として横須賀を含む三浦半島は厳しい監視下に置かれ、写真撮影や軍港の立ち入りなども制限された。柴田は「戦後、要塞地帯の桎梏を解かれた三浦半島は、未知の研究素材の宝庫であった」と記している(柴田 1985; 1992; 中里 2003)。

柴田は教員時代に研修で目黒の国立自然教育園に行き、鶴田総一郎の影響も受けたという⁽⁴⁾。国立自然教育園では、生態学実験講座が開催されており、1954年度にはその第3回を迎えていた。柴田は、国立自然教育園での生態学入門及び専門講座を聴講し、自分の理科の授業に生かし、放課後や土日には、生徒と共に野外を歩き回った。柴田の卒業後、県立横須賀高校の理科教員となった金田平は、柴田が創設した生物部の顧問を務めていた。柴田が坂本中学校で指導した中学生たちが横須賀高校に進学したことがきっかけで金田と柴田は知り合い、採集をしな

くても生物の名前は覚えられる、という共通した考え方を、生物部員を使いながら実験していった（鶴田 1954；神奈川新聞 1982a；柴田 1985；金田 1996）。

1956年に、博物館は、「国立自然教育園主催海岸の植物昆虫観察会」を迎えた。館の雑報には、「国立自然教育園では収集だけが目的であるような従来の採集会から脱却し、現地での観察を主にして、生態学的立場からの解説を併せて行う自然観察会を野に山に、或いは海岸に行って多大の成果を挙げておられるが7月23日はその海岸での観察会が当地の野比海岸で行われた」と記され、自然教育園から鶴田らが訪れたことが記されている（横須賀市博物館 1957a）。

1957年には「郷土の自然を探る会」として「採集のない自然観察」を実施、この会の様子は「本館の柴田が自然保護の立場から、無分別な採集を排した新しい自然趣味の確立が行われても良いではないかという趣旨のもとに……体系的な自然把握の方法などの説明があり、同時に参加者全員が夫々に知見を発表し合う、いわば参加者全員が講師であるという一風変わったこの会の在り方も説明した」と記されている（横須賀市博物館 1958b）。

柴田は1956年の第4回全国博物館大会から自然保護の問題を取り上げはじめ（柴田 1957a）、1957年には『博物館研究』誌上で、「博物館に於ける自然保護の問題」を掲載している。柴田は、この年の5月に、三浦半島双子山麓で某生物学会の採集会が行われ、指導者の懇願もむなしく、目の及ぶ限りのコウヤノマンネングサが採り尽くされた、という事例などを上げ、「館園によつて資料収蒐の為の下部組織として一般のアマチュア同好会と密接に結びついているが此処にも幾多の問題が残されている」と指摘している（柴田 1957b）。柴田は、「博物館資料蒐集のために鬼のようになって集めるという態度をみるとき」、「博物館の学芸員の収集と採集指導は別のものである。野放しで誤った自然観を与えてはいけない」とも記している（柴田 1961）。

「三浦半島自然保護の会」は自然発生的に生まれた会であるが、“採集会”と称する都心からの集団が半島の自然を荒らしてゆくことへの対抗策として、柴田らは、機関誌『自然のたより』を創刊するようになり、機関誌創刊の1959年を会の誕生の年ともしている（青柳 1975；神奈川新聞 1982a；1982c；金田 1996）。博物館の外郭団体の一つと位置づけられた三浦半島自然保護の会は、小学校高学年及び中学生よりなる実験グループを持って、採集することなしに動植物の名前を覚える方法、自然観察の基礎としてどうしても覚えなければならない動植物の選定、生態系の構造把握の方法などを試み、採集と標本蒐集を主体とした自然趣味の会とは一線を画した（横須賀市博物館 1960；柴田 1963）。

林公義（1965年から高校3年生で横須賀市博物館研究員、1969年技術員として採用、2003年から館長）が博物館にめざめたのは、「磯の生物採集会」であった。カニ小僧であった林は、この採集会で、カニの権威者、横浜国立大学の酒井恒によって、カニが脱皮する様子を観察することを示唆され、ただ採るのではなく説明があって必要なものしか採らない、参加者にじっくり見せて放す、「観る」ということを覚えたと言う⁽⁵⁾。小学校4年の時に博物館デビューした

林は、1956年から3年連続、「海の生物」「魚類の乾燥標本」「かのにの標本」のテーマで、館主催「夏休み採集展」に入賞している。当時の採集展の標本は最終的に博物館に寄贈されているため、現在では、当時の自然環境を知る大切な情報となり、現在もそのデータは生かされている（横須賀市博物館 1957b；1958a；1958c；林 2003）。なお、1958年の第4回を最後に、以後、博物館を会場とする市内小中学生対象採集展が開催された記録は残っていない。柴田は「横須賀市博物館が行なう自然保護のための観察会」を「原則として個人的な採集を禁止し、スケッチとノートを活用する。個々の形態より環境とのむすびづきを重視する」と紹介している（柴田 1963）。

博物館に出入りしていた縁で、林は、三浦半島自然保護の会にも入会する。林は、日大農獣医学部学生当時の1968年から1979年まで、『自然のたより』発行の事務局長を務めた。後に平塚市博物館学芸員になる浜口哲一は、昆虫少年だった中学生時代に横須賀市博物館で柴田に出会い、大学進学が決まった頃には、柴田に相談の上、自身の昆虫標本を整理して寄贈するために、毎日のように館に通っていた。1967年、浜口は、金田の自宅を訪問したのを機に、三浦半島自然保護の会に入り、『自然のたより』の編集会議にも参加するようになった（神奈川新聞 1982b；浜口 1996；2000）。

一方、羽根田館長は、1959年4月からの1年間、アメリカ科学財団の援助により、ウッズホール海洋研究所及びプリンストン大学の交換研究員として1年間渡航するなど、海外出張で館を不在にすることが多くなった（横須賀市博物館 1978a）。柴田はこの頃「専門職としての学芸員が教育職か研究職かについては、おおいに異論のある処であろう。研究畑を歩んだ人々は教育畑出身の学芸員を何とはなしに蔑視し（特に研究内容の水準などから）、教育畑出身者は研究畑出身者の社会的な視野の狭さ、教育面への冷淡さを兎角非難する」と記している（柴田 1960）。

羽根田の留守中、館を守った柴田は、羽田の「狭く深く」といった学問のあり方を東大アカデミズム、あるいはドイツアカデミズムと捉え、それに対して地方の博物館は、少数のスタッフでやりくりせねばならず、学芸員は市民へのなかだちの仕事、学際的な仕事ぶり・能力が要求される、と考えていた⁽⁶⁾。

現館長の林は、羽根田と柴田の2人についてこう評している。羽根田は、海外の博物館事情についてよく知っていて、博物館とは何をするとところかがよく分かっていた。博物館の理想像、海外では当たり前である研究を、平気でどんどんできた人であり、それが日本ではぜいたくともエゴともとられ、まわりが理解しきれていない。一方、柴田は、広く詳しい生涯学習の活動を横須賀に根付かせたが、専門研究者としての領域を広げることはなかった、と。林は、日本博物館協会の研修会の折に、部屋が一緒になった伊藤寿朗から、伊藤・森田編『博物館概論』の共著者となる話を持ちかけられた。林によると、伊藤は、羽根田的アカデミズムよりも、柴

田的活動の方を評価として高く見ていた、という⁽⁷⁾。

柴田は、1957年の段階で、払い下げ申請中の附属自然教育園を実習地とした自然観察の目標として、「決して専門家を養成するのではなく、この活動を通じて人生へのより豊かな喜びを増す為に自然に対する組織的な態度を養うことを目的とする。その為将来自然に接する機会の少ない銀行とか、工場とかの仕事にたずさわるような人々には特に進んで参加するよう働きかける」と記している（柴田 1957）。また、金田は、毎日新聞紙上の「こん虫採集」の是非をめぐる日浦との討論の中で、「我々は学者の卵を求めているのではなく、自然を大切にする一般社会人を育てたいという立場から厳しい種識別はいらないとするのだ」と主張している（金田 1975）。こうした柴田や金田の主張は、のちの浜口の「博物館の職員である学芸員には、いろいろな考え方の持ち主がいます。その中にはあくまで研究者であるということにこだわっている人も多くいます。一方で、社会教育職員としての視点を持ち続けていきたいと考えている人もいます。もちろん金子さん（金子功御園天文台台長：引用者注）は後者であり、自分がどんな研究業績をあげるかということではなく、自分の存在がいかにすれば地域社会に役立ち、地域の人の成長を手助けできるか、それを常に問うておられるように思えたのです」（浜口 2000）という記述に繋がるものであろう。

5. 羽根田による博物館の整備

1959年の博物館付属馬堀自然教育園の開設にあたって、羽根田はシンガポールの昭南博物館時代のことを次のように記している。

ドライブ視察の折り、ブキティマの丘の森林地帯のかなり広い地域（10ha）と海岸のマングローブ地帯が博物館の特別保護区になっていることを知った。私はなぜ博物館がこのような施設を持つのか必要性について尋ねた。この問題は5人（イギリス人科学者3名と、郡場寛植物園長、羽根田：引用者注）の会食の折りに何度も話題になった。博物館には標本があるが、生きた生物はいないので、研究や教育には生物を自由に観察したり、生物を調べる施設を持つことが必要で、イギリスではこのようなことが常識であると言われた。

羽根田は自然教育園の設立という理想を果たすために、長野市長に頼み込み、馬堀小・中学校の裏の軍用地であった国有林、三浦半島に残された自然林3.8haを博物館の付属施設とした（羽根田 1989）。

1965年に、博物館の付属施設となった天神島臨海自然教育園も、シンガポールの博物館付属マングローブ地帯の特別保護区にヒントを得たものであった。ハマユウの自然群落の分布北限地であった天神島に、島の南側の海面を埋め立ててヨットハーバーを作り、海のレジャーセン

ターを作る計画が浮上したため、横須賀市は天神島保護対策特別委員会を組織し、天神島・笠島を含む周辺海域を含めた全域を県の天然記念物に指定拡大する手続きを取り、その指定を受けた。そしてこの地域一帯を海の自然教育園として博物館が全面的に管理するよう、博物館条例の一部を改め、法的根拠を明確にし、「横須賀市博物館附属天神島臨海自然教育園」を開設したのであった（横須賀市博物館 1966；羽根田 1989）。

また1970年には、博物館の自然部門のみが深田台の中央公園内に新設移転した。この折のことを羽根田は「久里浜の博物館は敷地こそ広がったが、建物は旧海軍工作学校の転用であり、博物館とは性格の異なる体育会館が同じ建物内に併置しており、博物館は木造であるため、絶えず火災の心配をしていた」と記している。また羽根田は、「博物館運営上最も重要でまず第一に考えることは地域の資料、文献を完全に集め、分類整理し、完全な不燃焼の建物内に収め、永久に子孫に残すことである。一般には博物館と言えれば何か、古いものが並べてある所と思われる、資料の永久保管場所とは考えられていないが、資料の蒐集、分類、保管が完全になされていれば、博物館の目的は半ば以上達せられたことになる」と記している（羽根田 1971）。

1967年から博物館に勤めるようになった蟹江康光は、「三浦半島に分布のない中生代の地層から産出する白亜紀のアンモナイトを研究していた私は、フィールドを三浦半島の新しい時代の化石や地層を主な調査・研究対象にするつもりでした。その旨を館長に相談したところ、意外なことに白亜紀も三浦半島もやったらと言われました。このようなアドバイスをされた行政官でもある研究者には以後、めぐり会っていません」と、羽根田との学芸員としての最初の出会いを記している（蟹江 1995）。

研究型の羽根田は長野市長の理解を得て、横須賀市博物館を博物館として大きく整備していた。林によれば、羽根田の研究的な活動と、柴田の社会教育的活動は役割分担がなされており、博物館はそのどちらか両極端であってはならず、2つの性格がミックスされたものが横須賀市博物館には生きている、と言う。三浦半島自然保護の会の会員として柴田に育てられた林は、そのまま柴田2世となるのではなく、柴田からの脱却を目指し、林イズムを作りたい、と考えていた。科学の真理探究のためには標本の採集も必要であり、博物館には第一次資料が必要であり、資料の保存ができる人がまず博物館の中に必要である、その年によって社会教育活動・研究活動を各学芸員の選択によって選べる状況が大切だ、と林は考えている⁽⁸⁾。

1974年3月末、羽根田館長が退職、その3ヶ月後には、柴田も館を辞し、山階鳥類研究所に勤務する傍ら、自然保護にコンサーベイショニストとして活躍するようになる⁽⁹⁾。10年以上に亘って久里浜の地に残されたままだった分館（人文博物館）が、深田台に新設移転できたのは1983年のことであった（土屋 1983）。1981年には、赤星直忠から30,091点の考古資料が、また1987年には膨大な図書類が博物館に寄贈された（横須賀市博物館 1983；1992）。

6. 博物館コレクションの形成

大谷茂は、1954年に博物館研究員に、1959年からは常勤嘱託となった。その3月からは大谷を中心に、これまで三浦半島研究会の一部門として活動が続けてきた植物部会が、横須賀植物会として発足、博物館を会場に、ほぼ月1回のペースで採集会や同定会、発表会、懇話会、研究会などの行事が行われ始めた（大谷 1960；横須賀市博物館 1978；1989）。大谷は、記録に残る日本最古の野外植物愛好団体と推測されている横浜植物会（1909年創立）の世話役・松野重太郎（1868～1947）のあと同会を継いだ（村上 1988）。大谷は、1958年に刊行された『神奈川県植物誌』では、羊歯植物担当かつ総括メンバーの1人でもあった。アマチュア研究団体である横須賀植物会の調査の結果は館の雑報に発表され、これまでに博物館に収蔵された植物標本は、会の協力なしには考えられないほどだという（神奈川県教育委員会 1958；横須賀市自然博物館 1989）。大谷は神奈川県植物誌調査会の顧問を務めたが、『神奈川県植物誌1988』の調査開始後間もない1981年死去した（神奈川県植物誌調査会 1988）。

また、三浦半島の秋谷には、貝の収集研究家細谷角次郎が在住していた。1884年生まれの細谷は、小学校の代用教員を勤めたのち、郵便電信学校、東京物理学校に学び、埼玉県下の女学校教員の傍ら、秩父で岩石研究を手がけた。その後秋谷に戻り、家業の旅館を継ぎ、1911年から貝の採集をはじめた（堀越ほか 1963；池田 2003）。三浦半島研究会発足時のメンバーでもあった野村洋太郎と斎藤孝は、1933年以来細谷のもとに通い、採集の仕方や標本の選び方、作り方、保存の仕方などの手ほどきを受けた。斎藤は、細谷が相模湾を手にとるように知悉しており、本職の土地の漁師すら細谷のもとに相談に来ていた様子を書き記し、細谷の収集にかかる生きざまを次のように記している。

金で買い求めることは絶対といっているほど排撃された先生は、「自分のその目、その手で見た採らないことには……」こと標本に関しては、たとえ権威のある本の記載といえども頭から信用されない位厳格だった。その替わり「この海のこういうところで見つけた。」と言うに対しては眼を輝かせて喜びうなづいて下さった。「何時、どこそこの漁師がこういうことを言っていた」ということも非常に関心を寄せて聞かれたことである。……先生にはお弟子さんがなかった。真夏の炎天、ユラユラ激しくかげろう燃えさかる砂浜の熱風下、腹ん這って朝から日が落ちる夕方まで、目を皿のように探貝に没頭することは、とうてい常人のなし得る業ではなかった（斎藤 1977）。

細谷が貝の道に入ったのは種が多いからだと伝えられており、細谷のコレクションのことを野村は、「貝の宝庫といわれる相模湾を中心に3500種に及び、なお未発表の数々の微小貝類を残し、誠に一生一代の結晶の賜物であった」と記している（野村 1977；斎藤 1977；1992）。

横須賀市博物館開館直後の1956年、細谷は死去した。相模湾、東京湾の貝類がほぼ完全に揃い貝類同好者の羨望の的となっていた細谷コレクションは、野村、斎藤の仲立ちにより、博物館が購入することになった。購入に伴い、野村（汐入小学校校長）と斎藤（大楠小学校副校長）は博物館の研究嘱託となった。さらに研究員に委嘱された堀越増興（東京大学三崎臨海実験所研究員）、小菅貞夫（国立科学博物館）らも加わって完成した目録所載の貝類は3786種、一部未整理のものからは新種の出現が期待されており、細谷コレクションは4万点を越えていた（羽根田 1956b；1958；横須賀市博物館 1958d；1964；小菅 1995；堀越 1995）。

1962年、横須賀市はアメリカのコーパス・クリスティ市と姉妹市の関係を結んだ。これに伴い、1963年にコーパス市のコースタル・ベンド・シェルクラブ会員一同から、メキシコ湾産の貝類標本126種435点が横須賀市に贈られ、博物館に収蔵された。館では、斎藤、野村、小菅の協力を仰いで、254種600点の日本近海産貝類標本をコーパス・クリスティ市に返礼として贈ることができた（横須賀市博物館 1963；柴田 1995）。

1966年、羽根田の呼びかけで、細谷コレクションの整理作業をきっかけに相模貝類同好会が設立された。この会は博物館内に本部を置き、博物館と表裏一体となって会員が採集品を持ち寄り、東京湾や相模湾の貝類を細谷コレクションに加え、博物館資料の充実をはかってきた。なお、同好会の初代会長を務めた野村は、1984年に自身の1562種に及ぶコレクションの全てを神奈川県立博物館に寄贈した（相模貝類同好会 1990；波部 1986；1992）。

7. 『自然史博物館の収集活動』をめぐる

1970年の『博物館研究』誌は、研究集会「資料の保存」のための準備号として「特集：博物館資料の保存」を組み、小森厚（東京都多摩動物公園）の司会で、小菅、柴田、川瀬ツル（葉山観光館研究員・横須賀市博物館研究員）による座談会「自然博物館の保存の在り方」を掲載した。この中で柴田は、博物館こそ分類のメッカだという思想に対し、自然史博物館の使命は地域社会の自然に関してひとつの情報センターになることだ、と主張した。博物館が分類学だけに固まっていたら、分類学者の間では重宝されるが、地域社会での教育活動はうとんぜられる、というのが柴田の発言の趣旨である。そして、柴田自身、迷いがあったことを次のように記している。

一時そういう考え方、私非常に揺れていたんですけど、欧米諸国の博物館とはキャリアが全然違うわけですし、膨大なコレクションを持っている。……欧米と同じわだちを踏んでいく生き方と、時代の要請を汲み取って、先に地域社会の要求に答えられる体制を確立して、それから分類学の殿堂としての充実を図る。ふたつ考えられる。

この座談会の中では、前年の研究集会の折に大阪市立自然科学博物館の日浦勇が主張した内容が引き合いに出されている。一つはNatural Historyの語義の解釈問題であり、一つは「地域社会の人々の基盤である自然」という捉え方である。また小菅が、標本についているデータが必要不可欠であることを述べ、「資料がなくてもデーターによっていつでも利用できる位にしておけば、極論になりますが」と発言したのを受け、柴田は、「これからの自然史博物館では現地保存ということを真剣に考えないといけない」と述べている。また柴田は、一括資料の重要性と、一番ふんだんにあるポピュラーでゼネラルなものの標本の方が、地域社会の人々にとって重要な資料になることを主張している。さらに小菅は、白浜の瀬戸臨海実験所でこの年から始められる周年的観察データの集積計画を紹介し、地域社会では、ある程度年数を経た観察が必要であることを提案している（柴田ほか 1970）。

日本博物館協会の学芸職員第一期 5 ケ年計画研究集会の成果のひとつとして1973年に刊行された『自然史博物館の収集活動』は、柴田敏隆・太田正道・日浦勇の共同編集であったが、横須賀に泊り込みで議論を重ね、その第1章「資料収集の目的」は柴田が中心となって執筆したという⁽¹⁰⁾。事実、その骨子は1970年の座談会の段階でほとんど述べられているのである。またこの第1章と、1971年に柴田の個人名で出された「自然史博物館の研究活動」（1971）は内容的にほぼ同じであり、柴田が中心となった執筆であることが確認できる。

さて、第1章では、従来の分類学中心の資料収集を博物趣味的・牧歌的・没社会的と斥け、博物館は地域の自然誌の究明に努力すべきことを述べている。館外に保全の場（分園）を確保して「活きている博物館資料」を持つべき、という主張は、実際に横須賀での馬堀自然教育園・天神島臨海自然教育園の存在を踏まえた主張である。また、For Science（科学のため、真理探究のため）からFor Civilian（市民のため、地域社会のため）への転換の主張は、横須賀の開館直後、羽根田が設定した座談会での新谷（または畑井、註2参照）の発言がベースになっている。その一方で、この第1章では、「日本では、明治以降ヨーロッパのアカデミズムを余り良からぬ形で直輸入して、学問というものは、真理の探究が何ものより優先し、純粋理学の方が応用科学の方より価値が高い、という妙な偏見が跋扈している」「一匹狼的学芸員が己の欲するままにアカデミックな研究にのみ没頭することは、新しい博物館ではしだいに許されないことになりつつあると理解すべきである」（柴田ほか 1973）と、暗に羽根田型の学芸員を批判していると解釈できるのである。

8. 横須賀市博物館における「市民参加」

伊藤は『市民のなかの博物館』の中で、「一定の内容審査のうえで、市民の研究成果を発表する場を保障しようという試みは、1954年開館した横須賀市博物館が先鞭をつけました」と記している（伊藤 1993）。この記述は、1959年から始められた「郷土研究発表会」を指すものと

思われる。この発表会創設のいきさつについては、館の雑報に、「日頃、職業柄学芸文筆などに密接な関係の多い、学校の先生方に、その研鑽の結果を発表する場が欲しいという小中学校の校長会の要望があったことに端を発しているが、毎回の発表に学校の先生のそれが極めて少ないことはいささか残念なことといわねばなるまい」と記されている（横須賀市博物館 1969）。

第1回（1959年）から第15回（1973年）までの発表会での発表は、雑報に詳細な記載のない第6・7回を除いて、延べ117件あった。このうち発表者の所属が記載されていない第15回分を除いた99件の発表者の内訳は、博物館職員（他館職員、館外者との共同研究を含む）30件、小中高教職員（教育研究所関係者を含む）29件、高校生（部活動単位または共同研究も含む）16件、その他公務員14件、大学生・大学院生（共同研究も含む）10件、大学関係者1件、民間企業勤務1件、その他3件、であった。

1963年の第5回までは、高校生及び学校教職員の発表が中心であり、第6回には参加28名、第7回参加26名という記録が残され、1967年2月の第8回からは、館の大谷、柴田による発表が加わり、参加者数は42名まで増加している。また、1967年11月の第9回で発表された9件のうち、5件は館の研究報告に、1件は雑報に、その内容が掲載されることになった。その6件の発表者の内訳は、蟹江康光（雑報13では「市立明浜小学校教諭」と記載、1967年4月から博物館技術吏員）、山内和子（市立桜台中学校事務職員、館研究員経験者）、石渡隆之（人事院勤務）、亀掛川博正（神奈川県教育庁主事）、大谷茂（館常勤嘱託）、長谷川善和（国立科学博物館地学科研究員）である。この第9回を境に、高校生や小中高の教諭による発表が減少し、替わって館学芸員や研究員による発表が増加していくのである。雑報には、発表者の顔ぶれが固定化していることへの危惧が記されており、小中学校の校長会の要望から始まった郷土研究発表会は、館学芸員や研究員中心の発表会になっていった⁽¹¹⁾。そして、この発表会は、博物館学芸員への登竜門（林公義・蟹江康光・田辺悟・大塚真弘など）としての役割や、館学芸員・研究員が研究成果を市民に報告する場へとその性格を変えていったと思われる。

また、本稿冒頭で触れたように、伊藤は「博物館の公共性」の項目の中で、「大阪市立自然史博物館、横須賀市自然博物館、東京都高尾自然科学博物館などでも、市民と館が協力した調査が展開されている」と記している（伊藤 1991）。館の雑報上では、1959年に発会した横須賀植物会の活動記録が「横須賀植物会の歩み」という表題で1960年以降、毎号掲載されている。雑報12号では、相模貝類同好会の発足が報じられている。雑報15号（1970）からは、「調査と研究の会」として、横須賀植物会・相模貝類同好会の活動報告と、三浦半島自然保護の会の野外観察会と勉強会の記録が掲載されている。雑報18号では、柴田ほか2名によるカモメ誘致試験の報告、蟹江による堆積地域調査、林による淡水魚類調査の記録が加わり、19号では館員による学術調査の記録が増加、21号からは「調査研究活動」と表題を変え、「市民参加型」と目される活動の記録は雑報上には残されていない。1974年4月の羽根田の退職、同年6月の柴田

表1

柴田による調査例の記述			該当する実在文献データ		
	博物館問題研究会会報No.7 (1972年4月) 「博物館における自然保護」	月刊社会教育 No.192 (1973年11月) 「博物館における自然認識の活動」	該当文献	調査担当者	発行年月
①	三浦半島自然公園開発計画基礎調査	三浦半島自然公園予定地基礎調査	「三浦半島自然公園予定地基礎調査報告書」『神奈川県博物館協会々報』第4号	大谷茂（横須賀市博物館研究員） 柴田敏隆（同学芸員）	1960年 7月
②	横須賀市域における自然保護を要する地域の実態調査	横須賀市の自然保護を要する地域の実態調査	三浦半島自然保護の会『横須賀市委託 横須賀市域における自然保護を要する地域の実態調査報告書』	〈植物部門〉大谷茂・寺島浩一 〈動物部門〉金田平・柴田敏隆 神保均 〈地学部門〉蟹江康光	1965年 3月
③	愛樹運動（都市緑化）基礎調査	横須賀市愛樹運動基礎調査	横須賀植物会 『横須賀市委託 愛樹運動基礎調査（樹種調査）報告書』	横須賀植物会	1967年 3月
④	観音崎公園予定地計画基礎調査	観音崎公園予定地基礎調査	神奈川県横須賀土木事務所／ (株)スペース・コンサルタンツ 『観音崎公園計画基礎調査報告書』	横須賀市立博物館チーム (自然人文調査班) 柴田敏隆（横須賀市博物館学芸員） 高橋恭一（横須賀市市史編纂室） 寺島浩一・西条好迪・小川巖・小川均・浜口哲一 (以上三浦半島自然保護の会) 林公義（横須賀市博物館研究員） 川瀬ツル（葉山観光館学芸員・ 横須賀市博物館研究員） 蟹江康光・大谷茂 (以上横須賀市博物館学芸員) スペースコンサルタンツチーム (計画班) 前野淳一郎ほか5名	1969年 3月
⑤	県の鳥かもめ類誘致に関する基礎調査	県の鳥かもめ類誘致に関する基礎調査	日本野鳥の会横浜支部『横須賀市（観光課）委託 県の鳥かもめ類誘致に関する基礎調査報告書』	日本野鳥の会横浜支部 (調査員) 柴田敏隆・森田幹夫・後藤俊二	1971年 3月
⑥		三浦半島淡水系生物相調	「三浦半島の淡水魚類（三浦半島淡水魚類調査報告）」『横須賀市博物館研究報告（自然科学）』No.20. 「三浦半島の淡水魚類（三浦半島淡水魚類調査報告・Ⅱ）」同No.22.	林公義（以下、調査員） 梅林明央・伊東純・村田孝宏 鈴木敬一・鈴木茂也 伊藤孝（市中央保健所技術吏員）	1973年 12月 1976年 2月
⑦		横須賀市小原台の地質調査	「三浦半島東部、横須賀付近の第四系」『地質学雑誌』83-3	蟹江康光（横須賀市博物館） 新井重三（埼玉大学） 長沼幸男（大宮市立馬宮中学校） 大越章（新座市立八石小学校） 長田敏明 (法政大学人文科学科大学院) 高橋輝雄（中央地図院(株)）	1977年 3月
柴田による付記	行政当局に対して報告書を提出し、計画に当たっては直接的な指導助言	学習活動の基礎となる調査研究			

の退職を契機に、雑報は22号から館報と改題された⁽¹²⁾。以上の記録から、1974年までの横須賀市博物館における博物館と連携した「市民参加型」の「調査研究活動」は、横須賀植物会・相模貝類同好会による諸活動が想定されうる。また、三浦半島自然保護の会の活動は、野外観察会と勉強会が記録されている。

一方、1972年の『博物館問題研究会会報』No.7には、柴田の「博物館における自然保護」が掲載され（柴田 1972）、博物館問題研究会5月例会では柴田をゲストに迎え、伊藤を含む3名が柴田と「現在博物館の抱えている諸問題」について論じあったという（博物館問題研究会 1972）。この柴田の「博物館における自然保護」及び、『月刊社会教育』誌上に掲載された柴田の論考（1973）と伊藤の論考（1975）を重ね合わせてみる時、柴田が列挙した調査活動を、のちに伊藤が、「市民参加型」と表現した可能性が考えられる。まず、柴田が1973年の段階で上げた調査研究を年代順に整理し、館の雑報及び報告書からその担い手を拾い上げてみると表1のようになる。

柴田の論考を受ける形で、伊藤は、次のように記している。

法則の明確な自然史系では、従来みられた希少性の高い資料を中心とした分類展示から、逆に身近な雑草等の生態などという人間にとっての自然を重視するという方向に移り、横須賀市博物館等では、自然保護運動の教育的側面として、正しい自然観の確立のために必要な各種の地域生態調査を実施し、呼びかけている。（伊藤 1975）

つまり1975年の段階で、伊藤は柴田の主張に触発され、横須賀市博物館関連の「地域生態調査」に関心を寄せていたのである。ただしこれらの地域調査は、調査担当者に限っても、それぞれに性格の異なるものであり、どこまでを「市民参加型」と呼ぶのか、境界線は明確ではない。ここに至って、先に大阪市立自然史博物館を検討対象とした時と同様、「市民」とは誰のことを指すのか、という問題に逢着することになる（瀧端 2002）。

以下、柴田からの聞き取りを主に、各調査を検討してゆくと、②の調査に関わった神保均は横須賀高校の生物教員、寺島浩一は市立中学校教員であり、ともに東京教育大学の出身で金田の後輩であった（寺島 1962）。③では、横須賀市域の街路樹を調査するのに、柴田の車に大谷を乗せて走り回ったという。石渡治一や山田友久（ともに学校教員）ら横須賀植物会のメンバーは、休日に調査に参加したという。④の調査は、神奈川県横須賀土木事務所が、㈱スペース・コンサルタンツに調査を依頼、代表取締役の前野が博物館に相談に来て柴田と意気投合した、といういきさつとのことである。三浦半島自然保護の会の西条好迪は、1969年当時、東京農工大学自然保護学研究室に所属していた（蟹江・西条 1969）。⑤は、県の鳥かもめを見ることが出来る場所を作るためにはかもめを誘致すればよい、という案を柴田が審議会の委員とし

て提案、柴田は日本野鳥の会横浜支部の一員として、神奈川県観光課・横須賀市観光課から調査を受託し、博物館付属天神島臨海自然教育園で学芸員として調査を実施したという。調査を担当した森田と後藤は、野鳥の会会員であり、学生アルバイトとしてこの調査を手伝ったという。⑥の調査員は、館の雑報19によれば、1972年当時で伊藤孝（横須賀市中央保健所技術吏員）・伊東純（日本大学水産学科生）・鈴木敬一（私立聖光学園生）といった顔ぶれであった。

柴田によると、当時の受託調査は、受託者は意見具申は慎むべきだという風潮にあったが、柴田らが手がけた調査は、実態調査データの裏付けのもとに行政に対して意見具申を行ったものであった。地域社会への責任を果たすのが新しいプロのあり方だという、その新しい博物館のあり方を伊藤は評価したのではないかと柴田は推測している⁽¹³⁾。

次に、本稿冒頭に引用した公共性にまつわる伊藤の記述（市民自身が活動を通じて自己教育力を身につけ、その成果が地域や館に蓄積され、社会的に還元される）に即して考えてみよう。横須賀植物会は館への標本の寄贈はもとより、逗子市の植物調査、神奈川県植物誌調査、観音崎自然博物館の展示更新に協力し、1989年の時点で120名の会員を抱えている（横須賀市自然博物館 1989）。また、相模貝類同好会は、コーパス・クリスティ市への貝類標本の返礼と細谷コレクションの整理作業を会成立の契機としており、貝類専門の学芸員がいない状況の中で館を助け、1986年の貝類展示の全面更新に協力している（横須賀市自然博物館・横須賀市人文博物館 1987）。また、奥谷喬司は相模貝類同好会のことを「この海とそれを囲む地域の貝類の研究と保護監視にあたるためにあるようなもの」と記している（奥谷 1986）。一方、三浦半島自然保護の会は、林や浜口のような博物館人を育てるとともに、丹沢の鹿猟解禁反対（1960年）、葉山真名瀬海岸埋立反対（1963年）、江奈湾埋立反対（1966年）などの自然保護運動を展開した（柴田 1985）。これら3つの会は、その活動の成果をそれぞれのやり方で社会に還元していると言えよう。

9. 考 察

独学の人赤星は、考古学に限らず幅広い分野に関心を持ち、「僕は大学などに属さないから、誰にでも聞ける」「学校は勉強の方法を学ぶところで、本当の勉強は社会に出てから」と話していた。この赤星の言葉を、教え子の小暮は、「この二つのことは大学を出なかった私の人生の大きな励みであった」と記している（小暮 1992）。徹底したフィールドワーカーであり、よき教育者であった赤星の精神は柴田に引き継がれ、現在まで多くの後進を育てている。

伊藤寿朗は「日本博物館発達史」の中で、1960年代中小博物館における活動の定着例として、横須賀市博物館の自然保護の普及活動を上げている。この記述は、柴田を中心とする活動を描いていると考えられる。また、平塚市博物館の浜口は、大学紛争を経て、柴田の紹介のもと、平塚市博物館に就職した（浜口 2000）。浜口は、アカデミズムの問い直しを行い、博物館は地

域社会のために存在し、博物館の主役は市民であり、学芸員は地の塩である、という独特の哲学を持つ、と柴田は語る⁽¹⁴⁾。ここに「モノシリはいらない」とする伊藤の地域博物館論（伊藤 1991）につながる一つの流れを読み取ることが可能であろう。

「狭く深く」の羽根田型アカデミズムを否定した柴田は、また自然保護の立場から、従来の趣味的・牧歌的・没社会的採集と分類のみにとどまる学芸員のあり方を批判した。一般市民に対しては、金田とともに、採らず殺さず持ち帰らずをモットーとした新しい自然観察の手法を開拓した（柴田 1985）。柴田は、1957年の段階で、「採集しなければ観察できぬというのは困る。例えば、探鳥会などでは望遠鏡で観察することによって種々の観察ができる人が多くなっている。そこまで進歩する必要があると思う」と述べている（柴田 1957）。柴田らは「採集することなしに動植物の名前を覚える方法」を試みてゆくが、こうした実践と主張の背景には、柴田が守備範囲とする哺乳類・鳥類・爬虫類・両性類が、昆虫・魚類・その他の無脊椎動物・植物に比べて、はるかに種数が少ない⁽¹⁵⁾ことも、影響を与えているのではないかと考えられる。金田は、自然保護教育について次のように述べている。

生物教育は、かつて博物教育としてスタートしました。そこでは分類学がすべてであり、当然、採集し、形態を調べ、標本を作ることが中心であったわけです。……生物教育は、採集と解剖と標本製作、種同定といったものの技術教育であるかのごとき観すらありました。新種発見こそ科学的業績であったわけです。現在指導的立場にある人たちの中にもこうした教育を受けた人が多く、その人たちは「生物に親しむためには知ることが先決であり、知るためには採ることが必要だ」という論理で、依然採集を奨励しています。自然保護のために必要な自然知識としては生物が相互にどう影響し合っているかを知ることこそ必要なのであって、極端ないい方をすれば、それが何という名前であるかを知らなくても、そこに共存する生物との間に、食い食われる関係があったり、共同作業をしているという関係があったりすることを知ることこそ意味があるのでしょう。そうしたことは、捕らずに見ていてわかることだと思います。（金田 1975）

ここで考えるべきことは、分類と生態が果たして対立項で捉えるべきものであるのか、という問題と、「生物の名前を覚えること」は専門家の特権的行為であり、一般の人々には不要な、あるいは近づくことのできない特殊な知識なのか、という問題である。

第4章で取り上げたように、柴田や金田は、教育普及活動の目標を「決して専門家を養成するのではなく」「我々は学者の卵を求めているのではなく」と述べている。一方、横須賀市博物館の現館長林公義は、幼年期の横須賀の海を「私にとってかけがえのない遊び場であり、探検の場であり、何の制限もなく魚やカニを捕って遊べる貴重な環境でした」と述べている（林

2003)。また、細谷コレクションの整理を引き継いで1981～1985年の間、横須賀市博物館の研究員を勤めた相模貝類同好会の池田等（現葉山しおさい博物館館長）は、3歳の頃から浜に出て、海の生きものを拾っていたという⁽¹⁶⁾。

博物館を利用する市民に対しては、無限の可能性が開かれている必要がある。そのためには、博物館専門職は、研究オンリーで市民に背を向けてはならないし、逆にはじめから、市民の活動を研究から切り離すような接し方も望ましくないだろう。むしろ問題は研究の組織の仕方であり、参加型調査について酒井健は、「こと環境調査に関する限り、その環境の中で現に生活している多くの住民の直接的な協力が得られなければ、決して批判に耐えうるほどの結果は出てこないのではないか」と記している（酒井 1975）。博物館の周囲には、第6章で引用したように、「たとえ権威のある本の記載といえども頭から信用されない」細谷のようなアマチュアが存在が想定しうるのである。

齋藤純一は、その著書『公共性』において、「重要なのは、公共性へのアクセスを著しく非対称的なものにしている（広義の）資源の分配状況を問題化し、それをより対称的なものに近づけていくことである」と論じた。文化資本の再分配を目的とするのが、近代博物館の設置理由だとすれば、利用者である市民は、「知らないこと」よりはむしろ、「知ること」を積極的に求めてよいはずである。知ることの内容は、生態であろうが、分類であろうが、各人の必要に応じた探究が保障されてよい。また逆に、権威づけられ正当化された知を相対化する試みとしては、日本で最初にエコミュージアムを立ち上げた山形県朝日町の西澤信雄によって、朝日連峰の狩人志田忠儀を始めとする地域に生きる人々からの聞き書きの作業などが始まっている（志田・西澤 1991）。

齋藤はまた、「アーレントは、自己の内部にある複数の価値の間の対話を『思考』とよんだ。……一義的・排他的な同一化が廃棄するのは、まさに複数の価値の間での言説の空間としての公共的空間である」と論じる（齋藤 2000）。第7章で引用したように、柴田は、「分類学の殿堂」と「地域社会の要求に答えられる体制」という二つの博物館の目指すべき姿の間で揺れていた。日本の1970年代という時代的制約の中で、複数の価値の間での対話こそが公共性を保障する要件である、という発想はまだ想定外であっただろう。横須賀市博物館では、赤星・羽根田・柴田らが相異なる個性や資質をぶつけ合いながら博物館を創設・発展させてきた。そこで経験した内面的葛藤が原動力となり、柴田は日本博物館協会での議論を活性化させ、『自然史博物館の収集活動』や『博物館学講座』6を各地の学芸員との共同作業として完成させた、と読み取ることが可能であろう。

10. まとめ

創設期の横須賀市博物館では、英国型博物館像を追求し行政的に実現してきた羽根田弥太、

市民への啓蒙活動に大きなエネルギーを注いだ赤星直忠や柴田敏隆、に代表される2つの要素が、時には反発し、またその一方で補完しあう形で、博物館活動が作り上げられていった。柴田は羽根田型アカデミズムを否定し、従来の博物趣味的・牧歌的・没社会的な採集と分類のみにとどまる学芸員のあり方を批判した。柴田は金田とともに新しい自然観察の手法を開発し、採集によって名前を知ることより、生態観察の方が大切だと主張した。複数の価値観のせめぎあい、博物館の発展や博物館関係者の議論の活発化に貢献した、と考えることが可能であろう。

伊藤寿朗は、柴田の影響を受け、横須賀市博物館における生態調査に注目した。その一方で伊藤は、博物館が公共性を獲得するためには、市民参加型の調査研究が必要であると論じた。横須賀市博物館の開館から1974年までを調べたところ、三浦半島自然保護の会・横須賀植物会会員が関わる一部の「生態調査」と、横須賀植物会、相模貝類同好会の活動が、市民参加型調査研究活動に該当すると考えられる。伊藤の公共性にまつわる議論については、市民参加型と目される調査研究活動に参加した市民が、どのように認識や行動を変容させ、館や地域を変えていったのか、引き続き検証する必要があると考えられる。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C2）（2002～2003年度）「研究課題：博物館における市民参加に関する歴史的研究」の一部を用いてなされたものであることを付記しておく。

【謝辞】

本稿の作成にあたって聞き取り調査をさせていただいたのは、以下の方々である。横須賀市博物館元学芸員の柴田敏隆氏、横須賀市自然・人文博物館館長の林公義氏、同学芸員の山本健一郎氏、同研究員の辻井善弥氏、永野（渡辺）政美氏、同運営懇話会委員の石渡裕之氏、葉山しおさい博物館館長の池田等氏、横須賀考古学会会員の軽部一一氏、財団法人かながわ学術交流財団の塩野茂氏、柳田純氏、清水紀人氏、大阪市立自然史博物館学芸員の佐久間大輔氏。また本稿で参照した文献及びHPに関しては、大嶋貴明氏、林浩二氏、布谷知夫氏からご教示いただいた。大阪市立自然史博物館友の会読書サークルBooksのみなさんには、文献を通じ多くの議論をともにしていただいた。心よりお礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- 青柳昌弘 1975「自然保護教育の歴史と現状、今後の問題」日本生物教育学会・研究紀要（別刷） pp. 1-32.
赤星直忠 1929「高橋先生を悼む」考古学雑誌19-12 p. 29.
コーナー, E. J. H. (石井美樹子訳) 1982『思い出の昭南博物館』中央公論社.
ジロディ, D. (高階秀爾監修 松岡智子訳) 1993『美術館とは何か—ミュージアム&ミュゼオロジー』鹿島出

版会.

- 後藤和民 1979「館種別博物館における資料整理と保存法 2 歴史系博物館」『博物館学講座 6 資料の整理と保管』(古賀・徳川・樋口監修 柴田敏隆編) 雄山閣出版 pp. 153-183.
- 波部忠重 1986「祝辞」みたまき20 相模貝類同好会 pp. 7-8.
- 波部忠重 1992「野村洋太郎氏寄贈貝類標本目録」みたまき26 相模貝類同好会 pp. 10-11.
- 博物館問題研究会 1972「5月例会の報告 博物館と自然保護—柴田氏を迎えて—」事務局ニュース (1972. 5. 25発行) p. 2.
- 浜口哲一 1996「刊行にあたって」『金田平の自然保護講座』日本野鳥の会神奈川支部 p. 1.
- 浜口哲一 2000『放課後博物館へようこそ』地人書館.
- 羽根田弥太 1956a「畑井・新谷両先生をかこんでの座談会」横須賀市博物館雑報 2 pp. 2-5.
- 羽根田弥太 1956b「細谷翁の逝去」横須賀市博物館雑報 2 pp. 11-12.
- 羽根田弥太 1971「横須賀市博物館新館の完成」横須賀市博物館雑報16 pp. 1-6.
- 羽根田弥太 1972『発光生物の話—よみもの動物記—』北隆館 pp. 1-3.
- 羽根田弥太 1985『発光生物』恒星社厚生閣 pp. 1-7.
- 羽根田弥太 1989「馬堀自然教育園設置のいきさつ」横須賀市博物館報36 (馬堀自然教育園特集号) p. 2.
- 長谷川太一 1975「川西市の自然をみる—アンケート調査より—」兵庫県の自然 5-2 兵庫県自然保護協会 pp. 5-10.
- 林公義 1973「三浦半島の淡水魚類 (三浦半島淡水魚類調査報告)」横須賀市博物館研究報告 (自然科学) 20 pp. 18-40, pls. 9-20.
- 林公義 1976「三浦半島の淡水魚類 (三浦半島淡水魚類調査報告・Ⅱ)」横須賀市博物館研究報告 (自然科学) 22 pp. 29-38, pls. 4-6.
- 林公義 2003「博物館活動で学んだことの数々」横須賀ロータリークラブ週報 (2月28日第2548回例会) pp. 2-3.
- 林公義・鈴木茂也 1990「横須賀市自然博物館所蔵鳥類資料目録」横須賀市博物館資料集14 pp. 1-2.
- 堀越増興・野村洋太郎・斎藤孝・小菅貞夫 1963「横須賀市博物館所蔵細谷角次郎氏蒐集貝類標本目録」横須賀市博物館研究報告 (自然科学) 9 細谷角次郎氏蒐集貝類特輯号 pp. 1-2.
- 堀越増興 1995「羽根田先生の憶い出」みたまき30 相模貝類同好会 pp. 17-18.
- 堀田満 1977「近畿地方におけるタンボポ類の分布」自然史研究 1-12 大阪市立自然史博物館 pp. 117-134.
- 池田等・細谷角次郎 2003『細谷角次郎貝類図絵』(奥谷喬司監修) 遠藤貝類博物館 p. 6.
- 伊藤寿朗 1975「博物館活動の新しい質—その新しさと到達点—」月刊社会教育19-5 pp. 93-99.
- 伊藤寿朗・森田恒之編 1978『博物館概論』学苑社.
- 伊藤寿朗 1986「地域博物館論—現代博物館の課題と展望」『現代社会教育の課題と展望』(長浜功編) 明石書店 pp. 223-296.
- 伊藤寿朗 1991『ひらけ、博物館』岩波書店.
- 伊藤寿朗 1993『市民のなかの博物館』吉川弘文館.
- 金田平 1975「学校における自然保護教育」『自然の保護』(福島要一編) 時事通信社 pp. 187-198.

- 金田平・日浦勇 1975「討論「こん虫採集」の是非」毎日新聞 7月17日.
- 金田平・柴田敏隆 1977『野外観察の手びき』東洋館出版社.
- 金田平 1996『金田平の自然保護講座』日本野鳥の会神奈川支部.
- 神奈川県教育委員会 1958『神奈川県植物誌』序・凡例.
- 神奈川県植物誌調査会・神奈川県立博物館 1988『神奈川県植物誌1988』ぎょうせい p. 40.
- 神奈川県横須賀土木事務所・(株)スペース・コンサルタンツ 1969『観音崎公園計画基礎調査報告書』.
- 神奈川新聞 1982年10月14日「三浦半島自然保護の会 自然を愛して四半世紀 第1回「かながわ環境文化賞」を受賞 上」.
- 神奈川新聞 1982年10月16日「三浦半島自然保護の会 自然を愛して四半世紀 第1回「かながわ環境文化賞」を受賞 下」.
- 神奈川新聞 1982年10月29日「四半世紀の活動たたえる 三浦半島自然保護の会 第1回かながわ環境文化賞」.
- 蟹江康光・西条好迪 1969「神津島自然観察行」横須賀市博物館雑報14 pp. 28-31.
- 蟹江康光・新井重三・長沼幸男・大越章・長田敏明・高橋輝雄 1977「三浦半島東部, 横須賀付近の第四系」地質学雑誌83- 3 pp. 157-168.
- 蟹江康光 1995「アンモナイトと相模貝類同好会」みたまき30 相模貝類同好会 p. 10.
- 川上久夫 2001「神澤勇一君への追想」赤星直忠博士文化財資料館だより10 pp. 1-3.
- 鉦持輝久 1992「赤星直忠先生の思い出と私の誓い—大浦山洞穴・雨崎洞穴を中心として—」『赤星直忠の人間と学問』(横須賀考古学会編) 横須賀考古学会 pp. 90-93.
- 小暮慶明 1992「水滴石穿、須加力索の人」『赤星直忠の人間と学問』 pp. 63-73.
- 小菅貞男 1995「羽根田先生と発光貝」みたまき30 相模貝類同好会 pp. 11-12.
- 三浦半島自然保護の会 1965『横須賀市委託 横須賀市域における自然保護を要する地域の実態調査報告書』.
- 村上司郎 1988「神奈川県植物研究史(2)」神奈川県植物誌調査会・神奈川県立博物館『神奈川県植物誌1988』ぎょうせい pp. 1371-1376.
- 中里幸雄 2003「暮らしのなかで」『保存版 横須賀・三浦今昔写真帖』(辻井善弥監修) 郷土出版社 p. 55.
- 日本野鳥の会横浜支部 1971『横須賀市(観光課)委託 県の鳥かもめ類誘致に関する基礎調査報告書』.
- 野村洋太郎 1977「細谷翁の標本室を偲んで」みたまき13 相模貝類同好会 pp. 21-22.
- 能登路雅子 1999「歴史展示をめぐる多文化ポリティクス」『多文化主義のアメリカ』(油井・遠藤編) 東京大学出版会 pp. 187-208.
- 貫達人 1992「赤星さんを偲ぶ」『赤星直忠の人間と学問』(横須賀考古学会編) 横須賀考古学会 pp. 5-6.
- 小田原利光 1995「羽根田弥太博士を偲ぶ」みたまき30 相模貝類同好会 pp. 9-10.
- 岡本勇 1992「赤星直忠先生の学問」『赤星直忠の人間と学問』巻頭.
- 奥谷喬司 1986「“みたまき” 20年を祝う」みたまき20 相模貝類同好会 p. 9.
- 奥谷禎一 1980「アンケートに用いることのできる環境指標生物」関西自然保護機構会報 5 pp. 68-73.
- 大原一興 1999『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会.
- 大谷茂 1960「横須賀植物会の歩み」横須賀市博物館雑報 6 (表紙にはNo. 7 と誤記) pp. 5-6.

- 大谷茂・柴田敏隆 1960「三浦半島自然公園予定地基礎調査報告書」神奈川県博物館協会々報 4 pp. 4-12.
- 齋藤純一 2000『公共性』岩波書店.
- 斎藤孝 1977「細谷先生をなつかしむ」みたまき13 相模貝類同好会 pp. 22-23.
- 斎藤孝 1992「いづれか影かいづれか形」みたまき26 相模貝類同好会 pp. 7-10.
- 酒井健 1975「自然保護運動の指向するもの」『自然の保護』（福島要一編）時事通信社 pp. 128-167.
- 柴田敏隆 1957a「博物館活動としての自然保護について」博物館研究29-12 p. 48.
- 柴田敏隆 1957b「博物館に於ける自然保護の問題—特に採集会の在り方を中心として—」博物館研究30-7・8 pp. 1-10.
- 柴田敏隆 1960「「学芸員」に思う」博物館研究33-6 pp. 95-96.
- 柴田敏隆 1963「神奈川県における自然保護運動と博物館」博物館研究36-4 pp. 75-79.
- 柴田敏隆 1968「博物館の機能とその内部組織」『昭和42年度 学芸員研修会講演集』日本博物館協会 pp. 16-31.
- 柴田敏隆・小菅貞夫・川瀬ツル・小森厚 1970「自然博物館の保存の在り方 座談会」博物館研究43-1 pp. 25-35.
- 柴田敏隆 1971「自然史博物館の研究活動—横須賀市博物館の場合」月刊社会教育15-11 pp. 25-30.
- 柴田敏隆 1972「博物館における自然保護」博物館問題研究会会報7 pp. 2-15（この会報7はトップページには1971年4月15日と発行日が記され、奥付は1972年4月15日となっている）.
- 柴田敏隆 1973「博物館における自然認識の活動—自然を学び自然を守るために—」月刊社会教育17-11 pp. 32-39.
- 柴田敏隆・太田正道・日浦勇 1973『自然史博物館の収集活動』社団法人日本博物館協会.
- 柴田敏隆編 1979『博物館学講座6 資料の整理と保管』（古賀・徳川・樋口監修）雄山閣出版.
- 柴田敏隆 1985「証言」『自然保護のあゆみ 尾瀬から天神崎まで、日本自然保護協会三十年史』財団法人日本自然保護協会 pp. 362-364.
- 柴田敏隆 1992「赤星先生と私」『赤星直忠の人間と学問』（横須賀考古学会編）横須賀考古学会 pp. 25-38.
- 柴田敏隆 1995a「羽根田先生と本会の誕生」みたまき30 相模貝類同好会 pp. 12-14.
- 柴田敏隆 1995b「我が師、我が上司、羽根田先生」横須賀市博物館報42 pp. 38-39.
- 志田忠儀・西澤信雄 1991『朝日連峰の狩人』山と溪谷社.
- 鈴木政平 1954「横須賀市博物館の概要」博物館研究1-9・10 pp. 23-28.
- 鈴木保彦 1992「赤星先生のフィールドノート」『赤星直忠の人間と学問』 pp. 75-78.
- 高橋恭一 1958『新三浦半島史』中央堂書店.
- 竹澤嘉範 1992「赤星先生と古瓦」『赤星直忠の人間と学問』 pp. 50-53.
- 瀧端真理子 2002「大阪市立自然史博物館における市民参加の歴史的検討（1）—大阪市立自然科学博物館時代—」博物館学雑誌27-2 pp. 1-17.
- 瀧端真理子 2003a「博物館と市民の理解に向けて」三浦半島エコミュージアムかわら版2（財団法人かながわ学術研究交流財団） p. 2.
- 瀧端真理子 2003b「大阪市立自然史博物館における市民参加の歴史的検討（2）—長居公園移転以降—」博

博物館学雑誌28-2 pp. 1-22.

寺島浩一 1958「ハゼの木を訪れる野鳥」横須賀市博物館雑報4 p. 5.

寺島浩一 1962「自然保護の立場に於ける生物教育について」横須賀市博物館雑報8 pp. 4-7.

土屋博 1983「人文博物館建設の目的と経過」横須賀市博物館報30 pp. 3-4.

鶴田総一郎 1954「国立自然教育園の生態学実験講座について」博物館研究1-9・10 pp. 17-23.

山本珠美 1997「コミュニティ・ミュージアム—博物館と参加型文化活動—」日本社会教育学会紀要33 pp. 85-93.

横須賀市 2001『平成13年度（2001年度）版 横須賀市勢要覧』横須賀市総務部総務課.

横須賀市博物館 1957a「国立自然教育園主催海岸の植物昆虫観察会を迎える」横須賀市博物館雑報3 p. 9.

横須賀市博物館 1957b「夏休み採集展」横須賀市博物館雑報3 pp. 9-10.

横須賀市博物館 1958a「第3回採集展」横須賀市博物館雑報4 p. 8.

横須賀市博物館 1958b「採集のない自然観察会 郷土の自然を探る会」横須賀市博物館雑報4 pp. 9-10.

横須賀市博物館 1958c「第4回採集展」横須賀市博物館雑報5 pp. 16-17.

横須賀市博物館 1958d「人事異動 1958年4月1日発令」横須賀市博物館雑報5 p. 21.

横須賀市博物館 1960「三浦半島自然保護の会誕生」横須賀市博物館雑報6（表紙にはNo. 7と誤記載）p. 14.

横須賀市博物館 1963「コーパスクリスティ市より貝の標本」横須賀市博物館雑報9 pp. 47-49.

横須賀市博物館 1964「細谷角次郎氏収集貝類目録出来」横須賀市博物館雑報10 p. 22.

横須賀市博物館 1966「本館附属天神島臨海自然教育園の開設」横須賀市博物館雑報11 pp. 9-13.

横須賀市博物館 1969「第10回郷土研究発表会」横須賀市博物館雑報14 pp. 44-45.

横須賀市博物館 1978a「羽根田弥太学芸員の業績」横須賀市博物館資料集1 pp. 1-9.

横須賀市博物館 1978b「大谷茂学芸員の業績」横須賀市博物館資料集1 pp. 11-17.

横須賀市博物館 1978c「横須賀市博物館出版物目録 1954年3月—1978年3月」横須賀市博物館資料集2 pp. 1-27.

横須賀市博物館 1982「大谷茂先生の逝去を悼む」横須賀市博物館報28 p. 36.

横須賀市博物館 1983「赤星直忠博士寄贈考古資料目録」横須賀市博物館資料集7 p. 1.

横須賀市博物館 1992「赤星直忠博士寄贈図書目録」横須賀市博物館資料集16 p. 1.

横須賀市自然博物館・横須賀市人文博物館 1987「博物館事業報告1986年」横須賀市博物館報34 pp. 43-44.

横須賀市自然博物館 1989「三浦半島の植物研究小史」『三浦半島の植物—最近の研究成果から—』 pp. 37-38.

横須賀市自然・人文博物館 2002「蟹江康光学芸員の学術的履歴」横須賀市博物館資料集26 p. 7.

横須賀植物会 1967『横須賀市委託 愛樹運動基礎調査（樹種調査）報告書』.

湯田明 1992「赤星先生のこと」『赤星直忠の人間と学問』（横須賀考古学会編）横須賀考古学会 pp. 57-58.

【註】

（1）柴田敏隆氏からの聞き取りによる。

（2）柴田氏の記憶によれば、この発言は新谷武衛の言葉ではなく、畑井新喜司の言葉だったのではないかとのことである。また、柴田は「市民のために、そして科学のために」をオズボーンではなく、ルイ・

アガシーの言葉と認識している。柴田は、「畑井先生は、ニューヨークのアメリカ自然誌博物館発足当時の館長ルイ・アガシーの言葉をひいて、この館の指針とするに示唆にとんだお話をなさった。アガシー館長は先ずFor Science（科学の為に）と言い、10年後に今度はFor Civilian（市民の為に）と言われたというのである」と記している（柴田 1995b）。ただし、American Museum of Natural History（1869年創設）のHPによると、歴代のPresident of the Museumは、John David Wolfe（1870～）・Robert L. Stuart（1872～）・Morris K. Jesup（1881～）・Henry Fairfield Osborn（1908～1933）となっている（<http://www.amnh.org/museum/history/index.html>）。

- (3) 柴田氏からの聞き取りによる。
- (4) 柴田氏からの聞き取りによる。
- (5) 林公義氏からの聞き取りによる。
- (6) 柴田氏からの聞き取りによる。
- (7) 林氏からの聞き取りによる。
- (8) 林氏からの聞き取りによる。
- (9) 柴田氏からの聞き取りによる。柴田は「コンサーベーションリスト」を、「自然保護に話のわかるプロとして携わる人」と定義している（柴田『カラスの早起き、スズメの寝坊 文化鳥類学のおもしろさ』新潮選書、2002年）。
- (10) 柴田氏からの聞き取りによる。
- (11) 横須賀市博物館雑報 6（表紙はNo.7と誤記、1960年）～雑報19（1974年）に掲載された「郷土研究発表会」関連記録の集計による。
- (12) 横須賀市博物館雑報 6～館報22（1976年）掲載記録による。
- (13) 柴田氏からの聞き取りによる。
- (14) 柴田氏からの聞き取りによる。
- (15) 日本列島の現存の生物種数は、哺乳類241種、鳥類約700種、爬虫類97種、両生類64種、淡水魚約300種、海産魚約3,100種、昆虫約30,200種、その他の無脊椎動物約25,300種、維管束植物約8,800種、蘚苔類約1,600種、藻類約5,500種、地衣類約1,800種、菌類約16,500種である（財団法人日本自然保護協会『生態学からみた野生生物の保護と法律』講談社、2003年、2頁）。
- (16) 池田等氏からの聞き取り、及び横須賀市博物館館報28（1982年）～33（1986年）による。